

流動的な政治情勢を示す

# 鄧小平復権の背景とその意味

中嶋嶺雄

中国の政治情勢は、文化大革命、「林彪異変」を経過して、なお今日きわめて流動的であるように思われる。去る四月十二日、文化大革命の時期に、「資本主義の道を歩む第二の実権派」として

激しく批判され、一九六六年十二月以降、消息を絶つたまま、九全大会（一九六九年四月）では党中央委員にさえも選出されなかった鄧小平党総書記（六六年当時）が國務院副総理の肩書きを維持して北京の政治的舞台に復権したことは、このような政治の流動性を如実に示したものといはなくてはならない。

今回の鄧小平復権は、わが国においても、文化大革命における毛沢東主席の勝利と成功を信じていた人々にとっては、予測しがたい事実であったようであり、それだけに、大きな衝撃とさまざまな波紋を投じているようである。だが、文革の論理の挫折と中国の政治的潮流の変化を直視し、そこに脱文革——文革否定の方向をいち早く見い

だしていった者にとっては、決して予測できないことではなかった。

私自身は、すでに昨年七月、中国当局が林彪副主席のショックな死の筋書きを公表したとき、とくに「林彪異変」以後の中国の政治的潮流の変化を指摘しながら、鄧小平復権の可能性について本誌に次のように記したことがある。すなわち、当時から、周恩来総理が進めていたと思われる旧幹部の救済ないしは復活政策にふれて、「この傾向がさらに進むなら、中国の大衆に悪の代名詞として教え込まれた人物以外は、そしてそれらの幹部が今回の「林彪異変」に無関係であるのなら、たとえ文革期に激しく批判されていた人物であろうとも、思わぬ人物の復権がさらに進むかもしれない。つまり、劉少奇の復権はあり得ずとも鄧小平の復権があり得ないとは、もはや断言しにくくなっていく」（「林彪の死とその謎」、本誌七二年八月二十九日号。拙著「中国像の検証」へ中央公

論社）に収録」と述べたのであった。

## 政治的潮流の変化

私が右のように予測し得たのは、文革の挫折と中国の政治的潮流の変化という文脈のなかにおいてであり、したがって、今回の鄧小平復権についても、今日の中国において鄧小平の復権を必要とせざるを得ない政治的要因があればこそ、今日の時点で鄧小平が復権したのだととらえるのであるが、しかし一方、今回の事態をもつぱら中国の政治的安定化を示す指標として、したがって、文革の成功のゆえに鄧小平の復権が成ったのだとしてとらえる見方が、一部にはかなり支配的であるように見受けられる。そのような論者は、だから、鄧小平の復権は、「病を治して人を救い、前の誤りを後の戒めとする」毛沢東主席の暖かい幹部政策によって可能になったのだといい、また、文革が「闘争・批判・改革」という深まりを示し、今日

の改革段階にあっては、非を悔い改めない一握りの「劉少奇裏切り者集団」や「劉少奇のたぐいのペテン師」以外の幹部とは「団結―批判―団結」という政策によって再団結しようとしているのだという。また、ある人々は、鄧小平は、もともと重要な誤りを犯さなかったのであり、しかも、すぐに誤りを認めたので、決定的には失脚していなかったのだ、と見ているようでもある。だが、果たして、鄧小平復権の政治的背景は、そのようなものであろうか。

### 「批修」という路線闘争

私はまず第一に、一方で鄧小平が復権しながら、他方では、陳伯達を初めとする文革の先進的なリーダーたちの大部分が江青、姚文元、張春橋らを除きすでに相次いで失脚し、林彪ら軍首脳が最悪質の反革命分子としてすでに処断されてきたことの政治的意味を、今回の事態についても不可分なものとして重ねあわせて考えねばならないと思う。

そして、もしも今日の中国が、政治的安定度を「毛沢東思想」の勝利という文脈のなかでますます成熟させつつあるのなら、最近の「人民日報」や「紅旗」の主潮がつねに一貫して主張している「劉少奇のたぐいのペテン師の反革命修正主義路線」の打倒を、なぜこのように執拗に唱えねばならないのであろうか。ここで「劉少奇のたぐいの

ペテン師」が林彪を指していることについては、いまさらいうまでもなく、権力中枢におけるきわめて異質な「予防クーデター」的事件としてすでに一年前に解決されたはずの「林彪異変」の直接的な余波がまだ広範に残っているとも、われわれには思われないのである。

また、昨年十一月、「紅旗」第一〇号の倪志福（党中央委員）論文「経験主義の克服——レーニンの『唯物論と経験批判論』を学習して」が階級闘争と路線闘争について述べていた「一つの矛盾が解決すれば、さらに新しい矛盾が発生し、一つの戦闘に勝利すれば、さらに新しい戦闘を迎えなければならぬ」という表現はなにを意味するものであろうか。私は、この表現の含意はかなり大きなものではないかと思う。



鄧小平

そして、一九七〇年九月の中国共産党九期二中全会以来進められてきた「批修整風」（修正主義批判と整風）の闘争について、本年元旦の三紙誌共同社説「年頭の言葉」は、この闘争が当面、もっとも重要であり、しかも「批修整風」については、「批修」が第一であって、整風は第二であり、この両者の違いを厳密に区別しなければならぬとして優先順位を明確化したのは、なにを意味するのであろうか。

これらの点を、より具体的に論じているのが、「紅旗」一九七三年第二号巻頭の俞彤署名論文「党の建設は党の政治路線と密接につながらなければならない——〈共産黨員〉発刊の辞」を学習せよ」である。この論文は、最新の諸論調にしばしば見受けられる表現ではあるが、「毛主席がみずから発動し、みずから指導したプロレタリア文化大革命および今回の批修整風運動」（傍点、引用者）という表現をとって、今回の「批修整風」運動が文化大革命と区別される闘争の新しい段階であることを示し、同時に、文化大革命の収束を中国の指導者自身が認めていることを示唆しながら、ここではさらに、「まず第一が批修であり、その次が初めて整風である。批修とは、劉少奇のたぐいのペテン師の修正主義路線とその反革命の罪行を批判することである」と述べて、「批修」という路線闘争がいかに差し迫った課題であるかを告げているのである。

一方、先の元旦共同社説以来、毛主席の新しい指示だとして、最近の公式見解のなかに頻出して「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇権を求めない」というスローガンにもわれわれは注目せざるを得ない。

このスローガンは「戦争にそなえ、災害にそなえ、人民のために」という九全大会当時のスローガンをより具体化したものだとしてされており、文字どおり、対ソ臨戦体制の強化を謳ったものであると同時に、伝えられる食糧危機への対応を指示したものであるが、ここの「覇権を求めない」は、明らかに路線闘争、つまり党内闘争のなかで、いたずらに叛旗を翻してはならないということの意味するものである（この点で、米中共同コミニケや日中共同コミニケのなかの「アジアにおいて覇権を求めない」との文意とは異なるのである）。

### 現実主義路線への批判

このようにみると、問題の所在はかなりはっきりするのではなからうか。つまり、今日の中国の政治情勢のなかには、依然としてかなり大きな問題が潜在しているのであり、その問題をいかに克服するかが当面の課題になっているのである。

そして、全般的に問題を考慮するならば、文革小組組長兼政治局常務委員の要職にあった陳伯達が失脚した一九七〇年九月の二中全会以来とくに



劉少奇

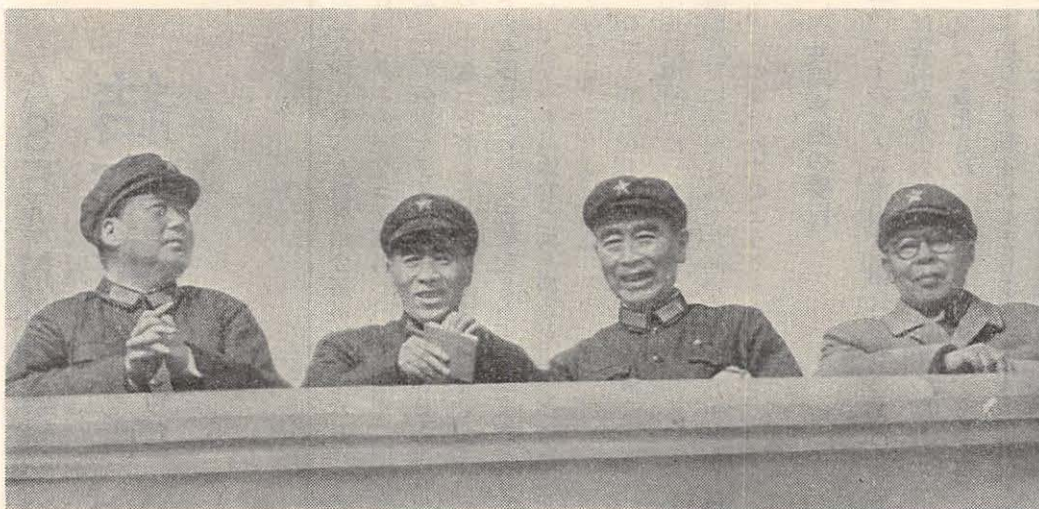
顕著になってきた脱文革化の過程が、翌七一年九月の「林彪異変」を経て、ますます明確になり、対外的には米中接近、日中復交の過程にみられたように、「革命外交」から「国家外交」への転換が進み、戦略的にも、六〇年代前半に劉少奇ら実権派が推進した「中間地帯」論が、今回は反ソ世界戦略の形をとって復活し（一九七二年十月一日の三紙誌共同社説「新しい勝利を奪取しよう」参照）、そうした過程を貫いて周恩来総理が主導する現実主義路線がますます大きな潮流になってきていることは、もはや否定できない現実なのである。

このことは、「毛沢東体制下の非毛沢東化」としても意味づけられようが、このような中国の内政・外交の両面にわたる大きな変化に対しては、それがますます確固たる潮流になりつつあるとはいえ、一方に、依然として根強い抵抗があることも以上の事例は示唆している。「覇権を求めない」というスローガンの意味も、このような状況

のなかでとらえることができようし、最近の公式論調の一部に、今日の主流をなす論調とは明らかにトーンの異なった「左翼的論調」も一方では存在し、現実主義路線への批判さえしばしば散見されるのも、事態の重要性をかなり明白に物語っている。

七三年一月十四日付け「人民日報」の蘇習署名論文「現実主義深化」論を批判せよが「現実主義」という言葉もちいて文革期のようなトーンで明らかに当面の潮流を批判し、また「紅旗」七三年第一号の辛永銘署名論文「決して階級と階級闘争を忘れてはならない」が、「和平麻痹思想」という言葉もちいて、明らかに「一部の同志の」平和共存路線を批判していることは、このような抵抗の存在を示している。にもかかわらず、最近の中国では「毛主席の江青夫人への手紙」が学習資料として伝達され、この手紙のなかで毛沢東はかねてから林彪への不信をもっていたこと、文革さえも、不本意ながら開始したことを述べていることが伝えられているが、この手紙の内容の真偽についての検討はさておき、このような手紙の伝達が事実だとすれば、今日毛沢東自身、このような立場を表明せざるを得ない状況が支配的になってきたことを、それは暗示しているといえるのである。

このような背景を考えたとき、鄧小平復権の意味は、きわめて重大である。



文革の高潮時、天安門楼上で紅衛兵・革命大衆の大集会を観  
 関する(左から)毛沢東、林彪、周恩来、陳伯達ら中国首脳

### 有能なオルガナイザー

ここで、鄧小平の指導者としてのイメージをか  
 えりみるならば、今回、彼が副総理として復権し  
 たとはいえ、彼は明らかに一貫して党官僚として  
 の、きわめて有能なオルガナイザーであり、理論  
 家であり、そして精力的な党務処理者であった。

私は一九六六年十一月、北京の人民大会堂で行な  
 われた孫文生誕百周年記念大会に出席した際、彼  
 が公式の場面に姿を現わした最後の機会ともいえ  
 るその舞台で、劉少奇とともに彼が明らかにマー  
 クされていたながら、終始平然たる素振りを示して  
 いた、そのときの彼の強靱かつ不撓の面貌を鮮明  
 に記憶している。それはともかくとして、一時は、  
 毛沢東主席に「鄧小平は五九年以来、六年間、私  
 に工作報告をしていない。書記処の仕事も眞真に  
 やらせた」(六七年一月八日の北京大学物理学部  
 紅衛兵の大字報)と批判され、六五年二月から三  
 月にかけては、北京で反革命の陰謀会議をいくた  
 びか開き、五六年のソ連共産党二〇回大会に際し  
 ては、ブルシチョフに合唱して個人崇拜に反対し、  
 こうして毛主席にそむいた等々の罪状を造反派か  
 ら激しく告発されながらも(六六年十一月の北京  
 大学の聶元梓以下一〇名連記の大字報)、今回、  
 見事に復権した彼の政治力を、われわれはいささ  
 かも無視できないであろう。

このような鄧小平の実力のゆえに、おそらく彼

の復権については、さまざまな抵抗があったであ  
 ろうことも推察される。鄧小平復権に先立つ三月  
 中旬、周恩来総理が約二週間にわたって公式の場  
 から姿を消し、党中央政治局委員および同候補委  
 員全員が三月十八日から二十一日までの四日間、  
 同じく姿を消していたという小さな謎について  
 は、鄧小平復権とも関連した重要会議が北京で開  
 かれたためだといえるのかもしれない。

ともかく、鄧小平は劇的に復権した。しかも彼  
 は復権早々、廖承志訪日団を北京空港に見送つた  
 り、訪中したメキシコ大統領一行と会見するな  
 ど、いちはやく精力的な活動を開始している。そ  
 して当面、彼は、各地にいま再建されつつある共  
 産主義青年団の全国的な再組織化や遼寧省、北京  
 市、上海市にすでに再建された総工会の再建につ  
 いても大きな役割りを演ずるのではなからうか。

こうして、周恩来総理の主導下に鄧小平との協  
 力体制を固めて「毛沢東体制下の非毛沢東化」が  
 今後すすみ、文革の傷が全般的に癒されてゆく  
 ならば、やがていつの日か、鄧小平が再び有力な  
 「後継者」候補になる可能性も否定できないので  
 はなからうか。周恩来は、いま國家的な使命感に  
 立脚しつつ彼の「遠大な構想」を着々と進めてい  
 るのかもしれないが、いずれにせよ、中国の政治  
 情勢は、なおしばらく、きわめて流動的であるよ  
 うに思われる。

《東京外国語大学助教》